「宗教改革500年」

本学の五十嵐先生におすすめの関連書籍をご紹介いただきました。こちらの書籍は「宗教改革500年」をテーマにして、図書館１階に展示されています。どうぞご利用ください。

紹介者
五十嵐　成見
（人間福祉学部チャプレン）

『マルティン・ルター ― ことばに生きた改革者』

徳善義和著　岩波書店　2012　ISBN：9784004313724
（１階新書・文庫　請求記号081 || I95(3) || 1372）

日本におけるルター研究の第一人者であり、世界レベルにおいても重要な貢献をなしている徳善義和氏が、新書用に書き下ろしたドイツの宗教改革者マルティン・ルターの伝記です。ルターの起こした宗教改革運動の源泉を、ルター自身における神理解の転換、すなわち「裁きの神」から、「恵みの神」への認識変化による「一点突破」にあると理解し、この中核に「ことば」（聖書）があったと解釈しつつルター像に肉薄しており、まさに一流のルター研究者の面目躍如たる堅実さ・手際よさをもって書かれています。

『ルター著作選集』

マルティン・ルター著　徳善義和ほか訳　教文館　2012　ISBN：9784764218055
（２階書架　請求記号198.385 || L97）

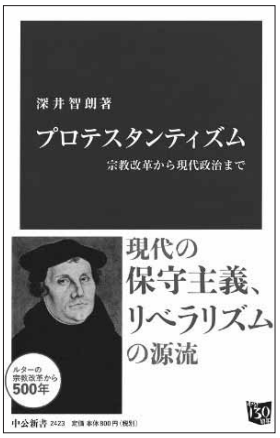
ルターが宗教改革運動の流れを決定づけた３大文書（「キリスト教界の改善に関して」「教会のバビロン捕囚について」「キリスト者の自由について」）を、一冊で読むことができるお得な選集です。さらに、宗教改革の発端となった「贖宥の効力を明らかにするための討論（95箇条の提題）」、メソディストを創設したウェスレーが回心へと導かれた文章として知られる「ローマの信徒への手紙序文」、人間の意志を巡ってエラスムスと討論した際の「奴隷的意志について」なども収録。深井智朗氏訳『宗教改革三大文書』（講談社、2017年）と合わせておススメです。

『宗教改革三大文書　付「九五箇条の提題」』

マルティン・ルター著　深井智朗訳　講談社　2017
ISBN：9784062924566
（１階文庫・新書　請求記号198.385 || L97）

『プロテスタンティズム　宗教改革から現代政治まで』

深井智朗著　中央公論新社　2017　ISBN：9784121024237
（２階書架　請求記号198.３‖F71）



聖学院大学でも教鞭をとられていた深井智朗氏が、宗教改革によって生じたプロテスタンティズムと、それが今日まで保持している歴史的意義とを描いている一冊です。ルターの宗教改革の受容史を、歴史的事実に基づいて考察しつつ批判的に提示している点など、無批判に宗教改革を記念するような風潮の今日において、冷静な判断を求める見方を提供してくれていますが、また同時に、特に教派・宗教を超えた「共存の作法」がプロテスタンティズムの理念において可能であり、また今日的意義であるとも主張しており、バランスのとれた視座をもたらしてくれます。

『歴史　わたしたちは今どこに立つのか』

藤本満著　日本キリスト教団出版局　2017　ISBN：9784818409729
（２階書架　請求記号198.３‖F62）

ウェスレー研究で定評のある藤本満氏が、ヨーロッパ大陸各地で起こった宗教改革運動全体―ドイツ、スイス、イングランドの宗教改革、これらの反動として起こったカトリック側の改革等―を過不足なく描いた、宗教改革史を学ぶ際の「教科書」的な本です。また、海を越えてアメリカへ渡り、独特の化学変化を起こしたリバイバル運動を伴うプロテスタンティズム、さらに日本のプロテスタンティズムの歴史などにも十分な量を持って触れており、世界全体のプロテスタンティズムの流れを一冊で理解することができます。

『はじめての宗教改革』

G.S.サンシャイン著　出村彰・出村伸共訳　教文館　2015
ISBN：9784764267213（２階書架　請求記号192.３‖Su74）

最後に、海外の研究者による宗教改革史の著作を紹介します。神学者を扱う「はじめての○○」シリーズの一環として出版されましたが、もともとはアメリカの教会の教会報に連載されたものが、教会の成人教室のテキストとして用いられた文章です。ルターの宗教改革から30年戦争までの時代に焦点を当てて描かれており、しかも宗教改革を取り巻く社会学的な背景を重視して描いているので、16～17世紀のヨーロッパ史が好きな人にはとくにおすすめです。内容は（邦訳の題に反して）必ずしも初心者向けではないように思えますが、じっくりと宗教改革の全貌を理解したい方に最適です。